

中国河南省汝南作戦参加

山形県 阿部 毅 一

山形県西五百川村と言う山村の農業、辨治の長男として大正十二（一九二三）年九月に生れた。弟四人、妹一人の六人兄弟で、母親はげんと申し、祖父母とともに一家十人の大家族でした。

西五百川村は他村と合併して現在は山形県西村山郡朝日町になりました。隣接の大江町や白鷹町山辺町なども戦後の町村合併で出来た町です。長男の私は小学生のころから祖父や祖母に連れられて山菜取りに山へ行ったりして健康に育ちました。取って来た山菜は干したり塩漬けしたりして長い冬の副食用に欠かせない貴重な物でした。

昭和十三（一九三八）年三月、西五百川高等小学校を卒業後も農業の手伝い、山菜採り、また冬期間は地域の方々と雪の降らない関東方面へ出稼ぎに行き、毎年家計を手助けしておりました。

昭和十八年、徴兵検査で甲種合格となり、同年十二月一日、北部第十八部隊へ現役兵として入隊を命ぜられ、出稼ぎ先から急遽帰宅して、当日の朝早く出立しました。

出征の当日は地域の方々はじめ青年団や小学生など大勢の方々に笛や太鼓の伴奏で軍歌を演奏しながら見送られました。

「天にかわりて不義を討つ

忠勇無双の我が兵は

歓呼の声に送られて・・・」

という軍歌に鼓舞されて、血沸き肉踊る思いで、心から国のため、天皇陛下のおんために命を捧げようと覚悟を決めました。

当日、村から一緒に出た三人は、四キロ程度の停留所まで歩いてバスに乗り、山形市のバス停からは歩いて北部第十八部隊に入隊しました。父親は営門で見送って「体に気をつけて頑張れよ」と言って帰って行きました。

入隊した私たちには軍服から下着まで、一切支

給され、私服はまとめて親元へ送りました。軍隊は我々の生活とは異なる別社会と感じたのは、下着一枚から折り目正しく畳んで整頓棚に上げて置くことで、これをきっちりしないと古年兵に棚から突き落とされ、おまけにビンタが飛んで来る有様でした。生まれて初めての体験で、戸惑うばかりでした。古年兵は郷土出身の人ばかりでしたので個人制裁などは、ほとんどなく、いろいろと親切に教えてくれました。

私たち初年兵は山形班二百四十余人で全員北支派遣軍の補充要員でした。一週間ほど過ぎた十二月八日、北支派遣独立混成第七旅団に転属命令が出て、北部第十八部隊を出発し、山形駅から乗車、博多駅に下車しましたが、その間は鎧戸を下されて、途中どこかも全然わからず博多駅に着きました。ここから港まで歩いて貨物船に乗りました。

制海権はまだ我が方にありましたので敵潜水艦の出没の話もなく、無事釜山港へ入港、釜山からは有蓋貨車で北支へ向い、到着した所は山東省博

山県と言う所で、独立歩兵第二十九大隊第四中隊に配属となりました。

生まれて初めての大陸で西も東も分からず古年兵に何から何までお世話になる。到着して三日くらは親切に教えてくれましたが、いよいよ初年兵の現地教育が、四日目から始まりました。小銃の名称から分解掃除、野外の戦闘訓練まで息つく暇もない厳しさでした。これが戦争なんだと教官殿の言う通り、ちよつと油断すれば命取りになると言うことが少し分かって来たころ、第一期検閲が終わって星二つの一等兵に進級しました。

その後、第二期、第三期の教育期間中に、第二中隊は全員が河南作戦のため転属出動となり、第二十九大隊所属四個中隊の各中隊からそれぞれ兵員が抽出され、新たに第二中隊が編成されました。

私たち初年兵二人も新しい第二中隊に編入され、特別に重機関銃教育を受けることになりました。

四月二十九日、京漢線が開通して独立歩兵第二十九大隊も河南作戦に参加することとなり、五月

二十日、河南省に移動を開始しました。日夜歩き通しの作戦で足元を見ながら歩いていると、直ぐかたわらを歩いていた戦友が「あっやられたっ！」と叫んで、ぼったり倒れました。私は反動的に身を伏せて難を逃れましたが、近くで「衛生兵前へ！」とどなる声がありました。

いつもなら敵の銃弾はピーン、ピーンと音がするのにも、このときはプスッ、プスッとほとんど聞こえませんでした。至近距離からの狙い打ちだったようです。そこまでの経験のまだ無い初年兵はすっかり慌てましたが、直ぐに古年兵が反撃して急場をのがれることが出来ました。先ほどの銃弾は隊長を狙った弾のようで、両軍の激しい銃撃戦になりました。

敵は城壁の中から撃ってくるので畑のような平坦な地形にいる友軍は存分に動き回ることが出来ず、私は戦車壕の跡のような堀に身をかがめていましたところへ指揮班長の芝曹長殿から「阿部、大隊本部からの命令を中隊に伝えろ」と言われま

した。しかし中隊はどこにいるのか分からず身ががめて探し回っていますと、後方から別な曹長殿が「阿部、危ないからうろろするな。本部からの命令は俺が伝える」と言われ、ほっとしました。私にとっては命拾いをした思いで、今でもあの時の有り難さは忘れられません。

太陽が地平線に近づいたころ友軍の陣地から二基の重機関銃が銃撃を開始した。しばらくするとあれほど激しく撃って来た敵の銃撃が、ピタリと止み、各隊は暗闇の中、その場で野営して翌朝明るくなるのを待ち城内に突入したが敵の姿は全く無く、武器も食料も何もありませんでした。

昭和十九年七月、河南省確山県にて旅団司令部警護中隊として確山に駐留し、汝南作戦に従事しました。

部隊は独立混成旅団から第百十五師団に編成替えされたようで、私は独立歩兵第二十九大隊の本部と第二中隊の連絡班として下士官一人、一等兵一人で中隊指揮班に入りました。

私は小銃でしたが師団編成と同時に新たに機関銃中隊が加わり戦闘力が一段と強化されました。

戦闘参加は確山に定着するまで連日連夜、山岳戦でした。汝南作戦では平地戦もあつたが、汝南城と言う立派な城壁の街の攻撃も体験しました。

中国では大都市ほど大城壁に囲まれており、重要な役所などは城壁の中にあります。戦争となれば強固な要塞となり、敵は要塞の中から撃つてくるので市街戦となると小銃だけでは不利です。

我々は、八路軍と呼んでいたが、彼らは我が軍の手薄を狙って攻撃して来ます。汝南作戦は蒋介石の正規軍との戦闘で、夜半まで戦って、敵が逃亡したので我が軍も引き上げたが、真つ暗な夜道の行軍で、すぐかたわらを歩いている兵隊が中国兵とも知らずに、相手もこちらを日本兵と分らず、ただ黙々と歩いて、一時間ほどして話掛けて相手はやっと日本兵と気がつき、黙って暗闇の中へ消えて行ったことがあります、今でも同年兵会などでこのことが話題になり大笑いしております。

作戦が終了して確山県の原隊に復帰した昭和十九年十二月一日付で上等兵に進級しました。同時に北海道から入隊して来る初年兵の教育係助手を命ぜられました。教育助手は主として内務教育で、現地教育ですし、また自分の初年兵当時を思いだして、口では相当厳しいことを言っても殴つたりの制裁はほとんどやりませんでした。

二カ月ほど経た昭和二十年一月三十一日、北京西郊の憲兵隊教育隊へ転属となり、二月一日、憲兵候補者過程へ入所しました。そこで憲兵の教育を三カ月受け、五月一日、憲兵教育課程を終了して改めて憲兵上等兵を拝命し、同日付で山西省太原憲兵隊勤務となりました。

憲兵隊勤務は一般民間の警察勤務のようなもので、その地域の保安が目的です。現地では便衣隊と称するスパイ事件なども無く、平穩な勤務でいました。

同年八月十四日、太原憲兵隊本部付となり、本部へ転属した翌日、つまり昭和二十年八月十五日

昼十二時を期して天皇陛下の重大放送があると言
うことで、全員講堂へ集合して拝聴しました。雑
音が多くてその時は、私にはよく分かりませんで
した。あとで隊長から「日本は無条件降伏をして
戦争は終わった」、と聞かされましたが、現地で
は軍の組織がそのまま維持されておりました。

十二月一日、憲兵兵長に進級しましたが、数日
して太原憲兵隊本部で中国の閻錫山直属の山西省
軍の武装解除を受けて武器弾薬を残らず引き渡し
ました。そのまま現地にいましたが、昭和二十一
年一月以降は天津に移動して、一般邦人の引き揚
げ業務や軍隊の復員業務に従事しておりました。

他人の世話ばかりで俺たちはいつ帰れるのだろ
うなどと話しながら、憲兵だから最後まで帰れな
いのか、と思っていました。昭和二十一年五月
二十日になって私たちも帰れることになり、アメ
リカ海軍の上陸用舟艇リバイ艇に乗船しました
ら鉄筋コンクリー建ての中を歩くような音がして
びっくりしました。

懐かしい母国が見えた時は涙が出るほど嬉しか
ったことを今でも覚えております。無事佐世保港
に上陸して復員手続きを済ませ、汽車で山形へ向
かいました。途中広島市の惨状に驚き、東京の焼
野原を目にして、どうせ勝てないならなぜもつと
早く終えなかつたのか、大本営のお偉いさん方は
何を考えていたのかと、腹の立つ思いでした。

乗車した汽車も窓ガラスは大半割られており、
座席のシートも大半切り取られ、情けない思いと、
これからの我が国のことなど、不安な思いを抱き
ながら山形駅に到着しました。

山形駅で左沢行きに乗り換えて我が家へ復員し
たのは、昭和二十一年五月末ころだったと思いま
す。幸い家族は皆元気で、田植えを目前にしてそ
の準備に忙しく働いておりました。無事に帰った
私にみんな大喜びで迎えてくれました。

二年六カ月の空白でしたが「国破れて山河あり」、
四方八方目にうつるものすべてが懐かしく、無事
に復員できた喜びが湧いてきました。

早速、翌日から家族と一緒に田植えなど、働け
働きの毎日でした。食料も衣料も生活必需品もほ
とんど無く、農家は食料を増産するための肥料と
して野や山の雑草を刈り堆肥を作り、年々増産に
励みました。

昭和二十三年十月に妻キヨ子と結婚、山菜取り
や栽培を行い、冬の農閑期には関東方面に出稼ぎ
に出たりして現金収入を図りました。子供も長男、
長女、次男の三人に恵まれて、現在はそれぞれに
皆独立して、孫たちも成長し、老妻とたのしく余
生を送っております。

戦後半世紀以上平和な日本国になったことを感
謝するとともに、その礎とられた英霊に心から
の黙祷を捧げることが責務と思っております。残
された限りある余生を、戦争とはいかに悲惨であ
り、すべてを破壊するものであるかを子孫に語り
継いで、永久の平和を祈ります。